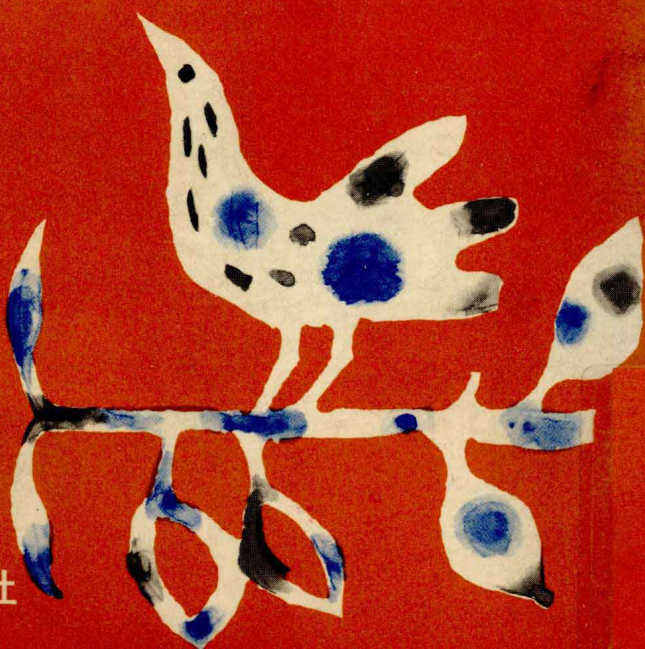


反抗期の導きかた

品川孝子 著



国土社

反抗期の導きかた

品川孝子 著



子どものもんだい 10

子どものもんだい 10

.....

著 者 しな かわ 孝 子 1967年10月13日 発行
発行者 長 宗 泰 造
印刷所 厚 徳 社

発 行 株式会社 国 土 社

東京都文京区目白台1-17-6 tel(943)3721

振替口座 東京 9 0 6 3 1

乱丁・落丁の際はおとりかえいたします

反抗期の導きかた

目次

子どもの成長における三つの危機.....	7
----------------------	---

第I部 第一反抗期の子どもたち.....	13
----------------------	----

1 第一反抗期とは	14
-----------	----

2 イヤイヤという気持ち	19
--------------	----

3 あばれんぼう	25
----------	----

4 なんでも自分でしてみたい	31
----------------	----

5 かんしゃく	39
---------	----

6 あれはなあに、これはなあに	43
-----------------	----

7 主役はいつもボク	49
------------	----

8 ボクだけかわいがってもらいたい	55
-------------------	----

9	けんか時代	58
---	-------	----

10	おしゃべり	61
----	-------	----

11	独立はしたいけれど	67
----	-----------	----

第Ⅱ部	感情的独立期の子どもたち……………	71
-----	-------------------	----

1	感情的独立期とは	72
---	----------	----

2	つげ口時代	78
---	-------	----

3	気持ちの上での独立	83
---	-----------	----

4	おとうさんなんか、おかあさんなんか	88
---	-------------------	----

5	おかあさんより友だちが大事	95
---	---------------	----

6	ギャングと大人はいうけれど	99
---	---------------	----

7 友だちのことは干渉されたくない

104

8 子どもの社会にも流行がある

109

9 みんな秘密をもっている

113

10 スリルが大好き

119

11 このごろ勉強がきらいになった

123

第Ⅲ部 第二反抗期の青年たち……………127

1 第二反抗期とは

128

2 全面的独立の主張

134

3 もう子どもではない

138

4 急激な身体的発達

142

5	性的発達と性的興味	145
6	きらわれるいばる父親	151
7	きらわれるうるさい母親	157
8	先生もただの人間	163
9	理論家で合理主義	168
10	両極端のお天気や	174
11	日記には秘密がある	180
12	見栄ぼうの恥ずかしがり	184
13	粗野でガサツ	188
14	潔癖感と理想主義	192
15	このころの劣等感	196

16 孤独をたのしむ 201

17 だれでも親友をもっている 206

18 敬遠される異性の友だち 211

19 不良化の危機 216

付 反抗期以外の反抗的行動…………… 221

あとがき…………… 229

そうてい 伊坂芳太良
しゃしん 富士ファイルム

子どもの成長における三つの危機 —はじめに—

生まれてから二十年にわたる子どもの成長の間には、実にさまざまな問題がおこります。

なにしろ、成長とは個性の完成であるとともに、既成の文化圏にうまく適応するために社会性を身につけることでもあるという、矛盾や混乱や衝突がおこりやすい二つの課題を、同時にすすめていかなければならないのですから当然のことかもしれません。

なかでも、かれらの成長の力と周囲の指導者との歩調がそろわなくなるといふ、三つの危険な時期があります。

そして、この危機的時代を一般に「反抗期」とよんでいます。

子どもの成長における変化は、なんの前ぶれもなく突然おとずれてきます。反抗期のおとずれは、いままで大人と子どもとの間にたもたれていた調和あるいはつりあいを破り、大人をともだちさせあわてさせるに十分なものをもっています。

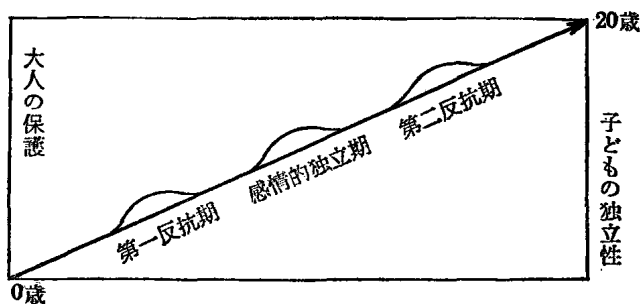
子どもは不均衡、混乱、動揺のなかを、つぎのより高い成長の段階にすすもうとするのですが、大人はこの状態に不安をいだき、いたずらに古い体制のなかにおしとどめようとしたり、必要以上の手をさしのべようとしたりして、ますます混乱をひどいものにしていくようです。

大人と子どもの最初の衝突は二歳から四、五歳ごろにおこります。子どもの身体的な機能の成長と身のまわりのことを独力でしたい要求に対して、大人があいかわらず援助と保護の手をさしのべようとする、相反する要求からおこってきます。そして、これが「第一反抗期」とよばれているものです。

つぎに、反抗期とはよばれないために、しばしば配慮をおこたりがちになる小学校三、四年に一つの危機がやってきます。これは、それまで子どもが感情的に依存していた大人からのがれて、子ども同士の社会を形成しようとする時期です。「大人より友だちがたいせつ」という気持ちから反抗というほどの攻撃性をもたず、もっぱら逃避し無視するという態度をもって大人にむくいます。

そして、第三番目の青年期におとずれる危機は、心身すべての面での独立の主張だといわれています。これは、非常に多方面にわたり、しかも青年特有の複雑な心理状態を反映して、も

子どもの独立と大人の保護との関係



ともあつかいに困難な時期でもあります。この危機を「第二反抗期」と呼んでいます。

これら、三つの危機的時期を比較したとき、だれでも、そこに流れる共通の要素に気づかせられるでしょう。すなわち「子どもの独立の主張に対する大人の必要以上の保護援助の手」という関係です。要するに反抗期は、この「依存と独立」のパランスの変化によってもたらされたものなのです。

大人は、子どもの成長に歩調をあわせて援助の手を減少させていかねばならないことを知っていますが、かれらの成長力が非常に急速で、しかも、独立の意識が目立って強固なときが、成長期の間に節のように存在することについては、案外うかつです。そのため手のぬき方もおくれしてしまいます。

上図は「子どもの独立性と大人の保護の関係」を図式化したものです。このように独立性と保護との関係は逆比例の形を

たどります。すなわち子どもが〇歳のときの独立性は〇パーセント、大人の保護は一〇〇パーセントであり、その後この関係は次第に逆の割合になり二〇歳のときは独立性は一〇〇パーセントであるのにくらべ、保護は〇パーセントになっているというわけです。むろん、実際には人間の成長は二〇年以後もまだつづき、しかも、依然として経済的にも精神的にも大人の保護を受けている場合もありますが、一応、独立の基準を二〇歳におけば、このような図ができると思います。

ところが、成長率はいつも一定の割合と速度を保ちつづけるわけではなく、とくに目ざましいときがあります。この場合、大人もかれらと歩調をあわせれば問題はないのですが、このつりあいが破れたとき反抗期的現象は激しいものとなって現われるのです。発達の状態を無視した大人の過保護に対する抵抗というわけでしょう。

また、反抗期は、このような独立の主張のほかに、大人および大人の社会に対する批判、自己の内部における発達の不均衡のための混乱、独立したい気持ちと独立しえない実力に対するあせりと矛盾など多くの特徴のある問題傾向をもっています。

したがって、それに対する大人の態度も、ただ「独立感さえ満たしてやれば」というのでは

ものたりず、やはりかれらの自己主張・不均衡・矛盾・混乱をよく理解した上での適切な処置でなければならぬのです。

また、最近では「うちでは反抗期のことをよく心得て取り扱っているので反抗はあまりされません」という両親の言葉を耳にしますが、たしかに、取り扱いや子どもへの態度が望ましいものであれば、反抗現象は軽くてすむようです。

しかし、反抗期の現われは、単なる反抗的態度ばかりでなく、子どもの生活の各分野にわたるいろいろの問題がおこりますから、やはり一つの危機をのりこえて、より高いレベルに進むように細心の注意が必要でしょう。

ここでは、第Ⅰ部第一反抗期、第Ⅱ部感情的独立期、第Ⅲ部第二反抗期とわけて、それぞれの年齢における発達の特徴、反抗の原因と現われ方、反抗以外の反抗期における目立った問題などの解説と、その指導法に重点をおいてかいてみました。

また、最後に反抗期と関係のない子どもの反抗について簡単にふれておきました。

子どもの成長におけるこれら三つの危機を解決するためには、大人のあたたかい理解と、注意ぶかい指導法が必要ですが、この書物がこのような意味でお役に立てばと思うものです。

第 I 部

第一反抗期の子どもたち

この間まで赤んぼうだったのにと思えば大人はつかばいたくなります。

しかし、もう、ころんでも、泣いても、あわててかけつける必要はありません。子どもには、伸びていく力があるのです。その自然の成長の力を尊重してやりましょう。

大人の流儀で、あばれたり、いたずらすることをおしとどめては困ります。子どもには、あふれるほどの活動力があるのです。あわてて型にはめることはいりません。成長の時期は長いのです。おしつけずに子どもにえらばせてみましょう。

1

第一反抗期とは

生活のすべてを両親に依存していた子どもが、突然その保護の手をはらいのけて自己主張をはじめます。いままで通りの姿勢を急にかえることのできない両親は、いたけだかにこれをおさえつけようとします。人生ではじめての親と子の衝突は、このような子どもの独立の主張をもってはじまるのです。

多くの子どもたちは二歳から四、五歳までの間に「第一反抗期」とよばれる時期をもちます。いままでのように万事大人の指図さしずを受け、なにごとによらず世話をやいてもらっていた子どもが、ことごとく自分の思い通りにしようとして「イヤイヤ」を連発しながら大人に反抗をこ